

J019-003

会場：C304

時間：5月30日 9:30-9:45

極域超高層における大気潮汐波の振る舞い () - スバルバル流星レーダー 1年間の観測 -

Studies on the behavior of atmospheric tide in the polar upper atmosphere(7)-Svalbard meteor radar 1-year observations-

麻生 武彦[1], 堤 雅基[1], Chris M. Hall[2]

Takehiko Aso[1], Masaki Tsutsumi[2], Chris M. Hall[3]

[1] 極地研, [2] トロムソ大・理

[1] AERC, NIPR, [2] NIPR, [3] Faculty of Sci., Univ. of Tromsøe

昨年3月に北極域のスバルバル(緯度79度)に新たに設置された干渉計方式の流星レーダー NSMR (Nippon/Norway Svalbard Meteor Radar) はほぼ1年間の連続観測を行い、春夏秋冬に亘る極域の中層大気・下部熱圏の平均場や大気波動の様相を捉えた。得られた極冠域潮汐波のクライマトロジーの一端としては、24時間成分が、春から秋にかけて位相が観測高度範囲で比較的安定な構造であったものが、冬季にいたって鉛直波長が短く、振幅も変動的で平均的には小さくなり、モデリングで示されたノンマイグレーション成分の冬季の高緯度帯への浸透に符合する様相を得ている。一方12時間成分は、夏季を中心に振幅が変動性を呈しつつ大きく、南極で見出された夏季のノンマイグレーション成分の卓越と矛盾しないが、冬季も間欠的に大きくなるなどその様相はさらに複雑であることが示唆された。